

私の教育論

～鵬友 50 周年に寄せて～

航空支援集団司令官 空将 織田邦男

目次

はじめに	3 教育再生に向けて
1 日本社会の惨状	4 自衛隊の教育のあり方
2 戦後教育の特徴と弊害	おわりに

はじめに

数年前、ある政治家が「日本は爛熟して倒れつつある」と述べた。最近の事件を見るにつけ、忘れていたこの言葉が妙に気にかかる。学級崩壊、学力低下、いじめ、自殺、援助交際、無気力、フリーター、ニート、パラサイト症候群、粗大ゴミの放置、給食費未払い、図書館の本の棄損、モラル溶解、マナー喪失、若者の拝金主義……親は子を虐待し、子は親を殺す、そして妻が夫を、兄が妹を殺す……。やはり日本は倒れつつあるのかも知れない。

かつての日本人は恥の文化を誇りとし、道義や品格を重んじた。公への献身的奉仕の精神は当然のことだった。こんな日本が今、消滅しつつある。世界史を紐解くと、国の衰亡は敗戦や恐慌でなく、所謂「緩慢な死」が最も多いと言われる。ベニスの歴史家ジョバンニ・ホテロは言う。「偉大な国家を滅ぼすものは、決して外面的な要因ではない。何よりも人間の心の中、そしてその反映たる社会の風潮によって滅びる。」また歴史家トインビーは「我々は常に、自らの内にある『虚ろなもの』によって亡ぶ」と言う。確かに日本は豊かになり、内から溶解し倒れつつあるのかも知れない。

トインビーは同時に主張する。「いかなる国家も衰退するが、その要因は決して不可逆なものではなく、意識をすれば回復させられる。国家衰退の決定的要因は自己決定能力の欠如だ」と。危機を真面目に捉え、問題点を認識して解決に向け動き出せば決して不可逆ではない。内からの溶解現象も止めることができるのだ。

国家の安全保障に携わって早三十有余年。最近は外的脅威より、内なる「緩慢な死」や「虚ろなもの」に危機感を抱くようになった。問題意識は二つある。守るべき日本が内から溶解してしまうのではないか。次に、自衛隊も日本社会の縮図である。虚ろな風潮に育てられた隊員達が今後とも危険を顧みず任務遂行ができるのか。

「虚ろな社会の風潮」の最大要因は戦後教育にあると筆者は考える。だが、国家防衛に任ずる自衛隊としては、日本の教育がダメだから、自衛隊員もダメになった、では済まされない。安全保障の最後の砦として、激流の中の巖の如く、「虚ろなもの」に立ちはだからねばならない。安全保障に「待った」はないのだ。

現在の日本社会の惨状をしっかりと見据えた上で、今の教育の何処が悪くて、何が足りないのか。そして今後の自衛隊での教育は如何にあるべきかを考えてみたい。

なお、ここで言う教育とは特技といった術科教育は含まず、もっぱら資質、素養といった精神的バックボーンに係わる一般教育を対象とする。

1 日本社会の惨状

「青少年を見れば、その国の未来が見える」と魯迅は言った。今の我が国の青少年を見るとき、日本の未来は決して明るくない。

現在、定職を持たない若者、フリーターが 300 万人、そして働きもしない、かといって仕事を見つける努力もしないニートと言われる若者が 100 万人いるという。

更に、東大、京大、慶応、早稲田等、有名大学の受験戦争を勝ち抜いた者が卒業の段階に至って、自らの人生を選ぶことができず、茫然自失する者が増えている。これを「たたずみ君」と言うらしい。

落ちこぼれを集めた学校の様子を放映したテレビを見て驚いた。授業の中で「自分で将来何がやりたいか、紙に書いてみなさい」と課題を出される。30分経っても、1時間経っても書けない。最後には書けない自分に情けなくなり、泣き出してしまう。

たたずみ君と落ちこぼれ、この二つの事例に共通しているのは、自分の生き方と国家、社会のあり方が繋がらないということだ。働くことに意義を見いだせず、一体何のために生きているのか分からない。かといって、切羽詰まっているわけでもない。社会全体が基軸を失い、「公」を喪失した戦後の動向と軌を一にする。

ある小説家が書いていた。正統な青春として自覚するための大切な手だてが三つある。①死の恐怖を与える戦争 ②戦争のもたらす貧困 ③血反吐を吐いてもぶつかって行かねばすまないほどの偉大な思想。現代社会では幸か不幸かどれも失い、青春を自覚できなくなったという。そうかも知れない。だが、今更そんなことを現代社会に求めるべくもない。

今、若者を苦しめている最大の原因は「公」の喪失だと筆者は考える。人間には本能的な三つの願望がある。①善い人間になりたい ②善い仕事をしたい ③人々を幸福にしたい この三つだ。この願望実現を自覚できたとき幸福感を味わうことができる。人間の本能には社会貢献願望が心底にあるということだ。ボランティア活動にいそしむ若者の生き生きとした表情を見てもわかる。募金箱にお金を寄付するときの顔は幸福感に満ち溢れている。

戦後日本社会は一貫して「公」より「私」を優先してきた。戦後教育では小学校から大学まで「個」や「自己」の実現の価値観は教えたが、「公」に尽くす価値観はあえて避けてきた。結果、日本社会全体が「公」という普遍的価値、基軸を失った。「公」に尽くすという人間の

本能的な国家、社会への貢献願望が抑圧された。結果、自分が何のために生きているのか分からない。そして夢も希望も失った。

「公」に尽くすという普遍的価値、根源的価値は空気のようなもの。戦中派世代くらいまでは当たり前だった。だが、戦後教育で育った若者には最早理解が難しい。当たり前のものが欠けると言わば酸欠状態になる。結果として若者を苦しめている。自分の生き方と国家、社会のあり方が繋がらない。フリーター、ニート、たたずみ君が登場するのは当然の帰結である。人間は金儲けだけでは生きていけない。

日本青少年研究所による 01 年の調査結果がある。「人生で最も重視する目標は国家や社会への貢献」と答えた人は米国、仏国では 70% を超えた。韓国では 30% 台、日本は 1 桁だった。

他方、「人生の目標として自分の好みにあった気楽な人生を送りたい」と答えた人は米国、仏国で 1 桁であったのに対し、日本では 61% あったという。気楽な人生には向上心も野心も、そして活力も希望も夢も存在しない。

2002 年に実施された筑波大研究グループの調査結果が如実に今を物語る。「将来に大きな希望あり」と答えたのは、中国 91%、韓国 46%、日本 29% だった。「日本には何でもある。夢以外は」の言葉に象徴される日本社会の疾病は裕福になったことだけが原因ではない。「公」の喪失という酸欠状態が大きな要因だ。

「公」を否定した結果、日本において国家、忠誠、奉公、国益といった言葉は死語化した。これは国際社会における日本の将来に暗雲を投げかけている。

2005 年 3 月 16 日の産経新聞に、日米中の高校生意識調査が出ていた。

「国に誇りを持っている」と答えた者が日本で 51%、米国、中国でそれぞれ 71%、79%、「国旗、国家で姿勢を正す」と答えた者が日本で 30%、米国では 82%、中国は 67%、「国旗を誇らしいと感じる」と答えた者が日本では 13%、米国で 54%、中国で 48% だった。前述の筑

波大研究グループの調査でも「自分の国に誇りを持っている」と答えた者は、中国 92%、韓国 71%に対し、日本は 24%だった。その差は歴然である。日本では「国家」が消失しつつある。

グローバル化された国際社会であるが故に健全なアイデンティティが必要になる。「国家」「公」が死語化した日本で育った若者がアイデンティティを喪失するのは当然だ。だが、アイデンティティに欠ける人間は今後の国際社会では生きていけない。このつけは必ずや将来に跳ね返ってくるだろう。

他方、「公」の喪失は、皮肉にも「公」への依頼心を増幅し、過度の国家依存と無責任体質を生んでいる。所謂、パラサイト・ナショナリズム現象だ。

数年前の国際的な意識調査結果が顕著に物語る。「自分の国に誇りを感じず」と答えた日本人は 54.2%であり、74 国中、71 位であった。「戦争が起きたら進んで国のために戦う」と答えた日本人はわずか 15.6%、59 カ国中 59 位の最低だった。一方、「国民が皆安心して暮らせるよう国はもっと責任を持つべきだ」と答えた日本人は 65.7%に達した。国家に尽くそうとしない人が国家に平然と依存する。やることをやらないで権利だけは主張する。ベントで子供を送り迎えする親が給食費を払わず、「国が払って当然」とうそぶく構図と同じだ。まるで、パラサイト、寄生虫そのものだ。

子供の意識調査にもパラサイト現象の浸透は見てとれる。「他人より少しでも給料の高い仕事に就きたい」と答えた子供は、日本が 73.6%、米国 53.3%、中国 78.4%であったのに対し、「偉くなると責任ばかり重く嫌だ」と答えた子供が日本で 51.0%、米国 16.2%、中国 36.5%だった。権利は主張するが、義務や責任は果たそうとしない。

「公」を喪失した結果、自由には責任が、権利には義務が付随するという当たり前の事が当たり前でなくなった。成人式典を騒いで妨害した若者が「騒ぐのは自由」とうそぶく。若い女性が恥じらいもなく電車内で化粧をする。いじめ自殺、医療事故で国を訴える。自己の責

任は回避しながら、国家に対しては厳格に責任を求め、補償を要求する。それでいて公務員は削減すべきと主張する。もはや国家は「打ち出の小槌」と誤解され、「ゆすりたかり」の対象に成り下がった。

普段、国の安全保障なんか顧みもしない国民が、北朝鮮のミサイル発射事件には「国はどうして国民を守れないのか」と憤る。事件の度に、「国は…してくれない」と「くれない族」が蔓延する。結果が800兆円にも上る天文学的数字の財政赤字だ。

昨年、教育基本法が改正され、「個人偏重」から「公」へと若干は軌道修正が図られた。結構なことである。だが、法改正しただけでは何も変わらない。この理念を徹底するための具体的措置が急務である。今や、次世代を担うべき学校教育、家庭教育が危機的状況にあり、一刻の猶予も許されない。

学校教育は崩壊寸前という。昨今、いじめ問題だけがクローズアップされているが問題はもっと幅広く深刻だ。昨年6月8日、埼玉県教育局が公立小学校での学級崩壊の現状調査結果を発表した。全823校のうち、97校(11.8%)、112学級で学級崩壊の状況だ。「児童が教室内で勝手な行動をして教師に従わず、授業が成立しない状況が2、3週間以上続く」という。戦慄を覚えるほどの実情だ。まさに「わがまま」の拡大再生産が学校で行われている。おそらくこれは埼玉県に限った現象ではあるまい。

家庭教育はどうか。学校に登校するとき、朝食を食べて来ない子供が多いという。わざわざ早く起きてまで食事を用意しない母親が多いそうだ。「食」は「人」を「良くする」と書く。食事は家庭教育の基本だ。「人は母親の子宮で育つと共に、母親の仕切る食卓の会話で育つ」と先人は言った。食事を作らない親は、食卓という家庭教育の機会を放棄しているのだ。

娘が援助交際で補導された時、「うちの娘とは携帯でコミュニケーションをとっていたのですが」と嘆く母親。携帯を持たせたことで親の役割を果たせたと誤解している親。躰一つできず、放任主義という名

の家庭教育放棄。こんな親にまともな家庭教育ができるはずがない。

いじめ自殺で親が文科省を訴える。親は自分の責任を果たしているのか。いじめは古代からある。人間の本性に付随する悪とも言える。いじめを肯定するわけではないが、なくならない前提で耐えることも教えなければならない。忍耐を教えるのは親であり家庭教育だ。

親は親の自覚なく、子供は子供の躰がなされていない。教師はその誇りがなく、生徒達は教えを学ぼうとする素朴さが無い。まさに日本の教育は四面楚歌だ。

戦後 60 年、「公」の消滅した日本に育った親は、自分の子供に何を期待するか。調査結果は物語る。「子供がどう育って貰いたいのか」との問いに対し、日本では、大多数の親が「他人の気持ちが分かり、迷惑をかけない」と答えた。米国では「リーダーシップがとれ、人の話を良く聞く」と大多数の親が答えた。社会への能動性、参画意識、当事者意識といったところで差異が顕著だ。「公」喪失のコピー教育が家庭でなされている。

「最大の国防は良く教育された市民である」とトマス・ジェファソンは述べる。国防に最も重要な教育が今、危機に瀕している。日本社会の惨状は戦後教育 60 年にわたるボディープロー効果である。では、戦後教育とは何だったのか。その特徴について簡単に振り返ってみたい。

2 戦後教育の特徴と弊害

(1) 権威の否定と悪平等主義

卒業式での国旗掲揚、国歌斉唱がこれほど論争になる国はおそらく、世界広しと言えども日本だけだろう。長い歴史の中でも未曾有の大敗北を喫した敗戦トラウマが人命絶対主義の戦後平和主義を生んだ。戦後平和主義は平和のためには全てを犠牲にして良いという「平和カルト」を作り上げた。手段と目的の混同、主客転倒、健康のためには

死んでもいいという「健康カルト」同様、滑稽とさえ言える。

「平和カルト」はマルクス主義と相まって自由社会体制や全ての権威を否定した。国家と歴史、民族と文化を貶め、国家、国旗を拒否し、揚げ句の果ては祖先、両親への敬慕、子弟間の礼節まで含めたあらゆる伝統的価値観に背を向けた。まさに戦前の全否定だ。戦前にも継承すべき素晴らしい価値観はあった。汚れた産湯を捨てようとして赤ちゃんも流したようなものだ。

敗戦トラウマの情緒的な風潮と共産イデオロギーに染まった教職員組合に教育界が牛耳られてきたのは日本にとって不幸なことだった。権威（国家、先生、親）の否定は教職員に天つばとなった。教室から教壇をなくし、教師を友達扱いにした。その結果、前述のとおり、教師が教室さえコントロールできない惨状を生んだ。教職員は自らの権威を否定することによって、自縄自縛に陥っている。

意識調査にも外国との差は歴然と表れる。「教師を尊敬しますか？」との問いに対し、「Yes」と答えた子供は、1位米国、2位韓国、3位中国の順に多かった。いずれも80%以上の子供が「Yes」と答えている。日本はアンケート中最下位で26%だった。50%を下回るとその国の将来は危ういと言われている。数字を見る限り絶望感に苛まれる。

教師自らが教職を聖職であることを否定して、労働者と位置づけた。政治ストライキに違法に参加し、生徒の目を憚ることがない。その姿を見続けた生徒達が教師の権威を否定し、規範意識の喪失に陥るのは自然の趨勢だ。国家、国旗等、より高位の権威を教師が軽んずれば、児童は最も身近な教師を否定することでそれを見習うのは当然だ。

権威を否定し、伝統的、普遍的価値を忌避した結果、何より日本人に致命的な傷を負わせたのは、国家、国益、奉仕、忠誠が死語化したことだ。国旗、国家、愛国心を忌避する側は、偏狭なナショナリズムを生み、戦前のように国家を戦争に導くことになる」と主張する。あまりにも情緒的で短絡的だ。この発想だと米国始め、英、仏、ロ、中、韓等々、殆どの諸国がとっくに軍国主義になっているはずだ。敗戦ト

ラウマによる「羹に懲りて膾を吹く」類であることに、もうそろそろ気づくべきだ。

グローバル化した国際社会の中で、一人でも多くの日本人が活躍を期待される時代において、愛国心のない日本人が外国人から尊敬されるだろうか。他国のナショナリズムを受け入れる自信に満ちた正統なナショナリズム、健全なナショナリズムなくして健全なインターナショナルナリズムはあり得ない。インターナショナル、グローバル、ボーダレスであるが故に健全なナショナリズムと強烈なアイデンティティが必要なのだ。

国家を忌避する側が「国際人たれ、地球人たれ、地球を愛せ」といったスローガンを虚しく叫ぶ。最も利己的な存在の国家集合体である国際社会の現実を直視すれば、「国際人」なんてあり得ない。アイデンティティを喪失した根無し草を生み、国際社会から蔑まれるだけだ。冷徹な国際社会へのリアリズムの欠如といえる。

権威の否定は悪平等主義を生んだ。本来求めるべきは機会の平等なのに、結果の平等を求める傾向にある。現在取りざたされている格差是正も結果の平等を求めるものであってはならない。英国のサッチャー首相は「金持ちを貧乏人にしても、貧乏人は金持ちにならない」と喝破したが、まさに箴言だ。

悪平等は皮肉にも著しい不平等を生む。かつて、革新都知事が採用した学校群制度がその典型例だ。学校の格差を無くすという結果の平等を求めた。結果的に公立高校のレベルは軒並み低下した。公立高校の教育に不安を持つ親は、レベルの高い私立学校を選択するようになり、塾通いが盛んになる。皮肉にも塾に通わせることのできる金持ちだけが質の高い教育を受けられるという著しい不平等を生んだ。

ゆとり教育もそうだ。その理想は兎も角、等しく程度を落とす教育制度となった。結果、ゆとり教育を採用している公立学校は敬遠される。今年1月16日の朝日新聞によると、07年度入試で東京など1都3県では中学受験者が5万人を超え、小学6年生の6人に1人が私立

を受験するという。貧乏人は質の劣る公立学校でしか教育を受けられないという不平等を生んでいる。そもそも、ゆとりは自分で努力して作るものであり、決して与えるものではない。与えた途端「小人閑居して不善を為」し、学校が荒廃するのは当然の帰結だ。

「徒競走、お手々つないでゴールイン」は悪平等の極みだ。この悪平等主義は無気力、無関心を生む。共産主義の失敗と同じである。人生は多かれ少なかれ競争だ。あらゆる面で競い合い、しのぎあって初めてそれが当人の自己認識となり、各人各様の志、すなわち実現可能な夢が形成されるのだ。かつて学校は少年に志を与え、人生の動機付けをさせる場所であった。悪平等主義の学校教育が無気力、無関心なニートやフリーターを生んだと言っても過言ではない。

(2) 「自主性尊重」という名の教育放棄

「自主性尊重」「個性尊重」「個人主義」は戦後教育で特に重視されてきたスローガンだ。「楽しい学校」「子供の自主性尊重」「子供中心主義」だの、一見、誰にも反対できないような美名の下、あらゆる「強制」が教育現場からなくなった。生徒手帳から細かい服装規定が消え、規律を強制する手段を失った。

子供に対し「自主独立した個人としての理性的判断」を求めることなどは土台無理な絵空事である。まさに「自主性尊重」という名の教育放棄だ。結果、学校秩序は崩壊し、教育現場はコントロールを失った。制服のズボンをずらしてはいたり、革靴のかかとを踏んづけて履いたり、ボタンをだらしなく外したりすることは、決して個性でもなんでもない。日本を愛し続けた日本文学研究者ドナルド・キーンは、「学校崩壊」「モラル低下」「マナー欠如」等、日本の惨状を見て嘆く。「どうしてこうなったのか。戦後、日本が自由になったからでしょう。戦後の民主主義はいいことですが、自由を乱用しないというのはとても難しいことです。」

個性尊重とはいったが、日本で言う個人主義は私生活主義だ。自分勝手に非常識なのは、個性が強いのではなく、我が強だけだ。素直な

心と社会性があるって、初めて個性に成長する。普遍的価値、善悪、マナーや常識を強制することが先決であり、その後、厳しい環境に打ち勝ち、磨かれ、人間の根源が出てくる中で育まれるものこそが個性なのだ。

強制には忍耐が要求される。最近の子供はすぐ「切れる」。忍耐が続かないと言われる。強制が消えたことが大きく影響している。イギリスのブレア首相は「7歳児童たちの読書量が将来の世界に於ける英国の位置そのものである」と言って読書を奨励する。だが、読書の楽しみを自ら覚えるまでは強制によるしかない。強制が消え、ゆとり教育と相まって子供は読書をしなくなった。「将来の世界における日本の位置」は暗い。

最近の国際的なスポーツ大会における日本勢の無惨な結果を見てもよくわかる。強くなるには長期にわたる辛くて厳しい練習に耐えなければならない。才能と技術、そして何より忍耐が必要だ。昨年のアジア大会（ドーハ）では、金メダル数は中国には遙か及ばず三分の一にも満たなかった。（中国 164 個、日本 50 個）人口が半分以下の韓国にも負けている。（韓国 58 個）昨年 12 月、台湾で実施された剣道世界選手権では準決勝で米国に破れ、初めて優勝を逸した。優勝したのは韓国だ。お家芸の、剣道、柔道、そして国技の相撲でも外人勢に圧倒されつつある。

アメリカは過去、同様に失敗した。だが、失敗に気づきいち早く手だてを打って既に回復を見せた。60年代後半から70年前半にかけて、教育の「自由化」「人間化」「社会化」を主張する教育理念が提唱され、「子供中心主義」が蔓延った。学校を子供達にとって有意義で、より楽しい場にしようと努力がなされた。その中で、知識を暗記するとか、つづりや発音を教える教育とかは、退屈な活動としてカリキュラムから消されていった。その結果、「教師は昔の毅然たる姿勢を失い、生徒の歓心を買う芸人と化し、生徒は権威に対する尊敬を忘れて刹那的に走るものが多くなっていった。これが70年代初頭におけるアメリカ

の学校の風潮であって、伝統的な『古き良き教育』がほぼ完全に崩れ去ってしまった」と加藤十八氏は自著「アメリカ教育のルネッサンス」で述べている。

学校秩序は崩壊し、校内暴力、麻薬・アルコールの乱用、セックス・10代妊娠急増等、手が付けられない状態になった。15歳から19歳の自殺率も3倍に増加した。中産階級の親たちは子供を公立学校に託すことはできないと考え、学校にやらずに自宅で教えたり、経済的に豊かな層は私立学校に通わせるようになっていった。

80年代、レーガン大統領は米国の学校教育に危機感を持ち、国家を挙げて教育改革に着手する。「我々の国家は危機に瀕している。かつて我が国は、通商、産業、科学、技術革新の各分野で優位を誇っていたが、今や世界中の競争相手にその地位を脅かされている。その原因は何か。それは教育である」と述べ、強力なリーダーシップで改革を遂行した。事実、アメリカの教育と経済は再生した。

米国の教育改革理念は「ゼロ・トレランス」である。これは、もともと産業界の理念で「不良品を絶対作らない」「妥協しない」というものである。子供が規則を破れば直ちに処罰し、場合によっては矯正のための学校に送致する。治れば元の学校に戻す。この方法で学校に規律が戻り、むしろ子供達は伸びやかに生活し、安心して学業に励み、学力も向上したという。

「自主性尊重」「子供中心主義」「子供解放運動」に基づく「偉大な実験」は米国で失敗に終わった。にもかかわらず、日本はまるで周回遅れのマラソンランナーよろしく同じ失敗を後追いし続ける。「経験は最良の教師、ただし授業料がかかりすぎる」という。失敗と分かっているのに、何も高い授業料を払ってまで繰り返すことはない。

そもそも「自主性尊重」はジョン・ミルの「自由論」に影響を受けている。平たく言えば他人に迷惑をかけない限り、自分に関する事柄に関しては何をしてもよく、他人がとやかく言うべきではない。まして権力がそこに介入してはならないと言うものだ。所謂「自己決定論」

である。だが、大きなポイントがあえて伏せられている。ミルは「自己決定」の主体から子供を排除すべき、つまり子供を「自主性」にまかせてはならないと述べる。「子供は未だ他の人々の世話を受ける必要のある状態」にあり、「外からの危害に対してと同様、自らの行動に対しても保護」されねばならないと主張するのだ。

学習には、必ず、難しいことや、楽しくないが大事なことも含まれている。それをやらせるには強制以外ない。自主性尊重という美名に隠れた教育放棄は厳に忌ましむべきである。

(3) 歴史教育の軽視

「大空のサムライ」の著者で零戦の撃墜王、坂井三郎氏が山手線での若者の会話を聞いてショックを受けたとの記事を読んだことがある。

若者 A「おい、知ってる？」

若者 B「何？」

若者 A「日本ってアメリカと戦争したんだってよ」

若者 B「え～、マジかよ。で、どっちが勝ったの？」

事実であれば誰でもショックを受ける。学校の歴史教育では、延々と縄文、弥生時代を習い、せいぜい江戸時代中期頃で時間切れ、打ち止めになる。近代史はほとんど教えていないのが実情だ。なるほど太平洋戦争を知らぬ若者がいても不思議ではない。

トインビーは「ある国を衰亡させるには、その国の先人達が気概を示した歴史を教えなければいい」と言った。世界に誇る無血革命であった明治維新、そして大国ロシアを倒した日露戦争等、先人たちが気概を示した歴史はあえて伏せられ、学校でも教えられていない。西郷隆盛、大久保利通、東郷平八郎、乃木希典などの人物を知る日本人は少なくなった。自分で歴史小説等を読んだ人だけだろう。東郷平八郎、乃木希典の名は世界的には有名だが、日本の教科書にさえ載っていない。日本の歴史教育は、日本を衰退させようとしているとしか考えられない。

数年前、防衛交流で韓国訪問をしたとき、韓国空軍将校の必読書に

「坂の上の雲」があるのに驚いた。韓国では、国を挙げて自国の歴史はもちろん、ライバル国、日本の歴史についてもよく研究している。日韓の学生が近代史を議論すると、日本の学生は韓国に歯が立たないという。躍進めざましい新興国や勢いのある国は、概して、歴史を大切にし、輝かしい歴史を創造しようと努力している。

神話についてもそうだ。日本で神話が教えられなくなって久しい。「12、13歳頃までに民族の神話を教えられていない民族は、例外なしに滅んでいる」とトインビーは言う。日本は「例外なし」の部類に入るのだろうか。

また、学校で使用する歴史教科書は驚くほど自虐的である。マルクス史観の影響を受け、権威、権力の否定が底流にある。明治の元勳、伊藤博文を暗殺したのは朝鮮人の安重根であるが、日本の教科書では安重根があたかも英雄の様に記述されている。しかも太字で。「伊藤博文」は平文字にもかかわらずだ。韓国では英雄かもしれないが、日本ではテロリストに違いない。伊藤博文は韓国では不倶戴天の敵かもしれないが、日本で元勳だ。歴史は水蒸気のようなもので、見る角度によって変わる。雲にも見えれば、虹にも見える。あえて他国の視点で見た歴史を学校で教える必要はない。

予断になるが、20数年前、米国空軍大学に留学中、同僚の英国空軍将校に質問したことがある。「イギリスの学校ではアヘン戦争をどのように教えているか」と。英国将校の返事に驚いた。「義務教育では教えていない」と答えた後、逆に質問された。「なぜ、アヘン戦争を教える必要があるのか。」虚をつかれ、言葉を失っていると英国将校は続けてこう言った。「学校の歴史教育は、子供達に対し先人が示した気概を教え、国家との一体感を育み、国家のために頑張ろうというやる気を起こさせるための教育だ。アヘン戦争は大英帝国の栄光の歴史の中でも題材としてはふさわしくない。だから、義務教育では教えていない。」あの時の驚きは「目から鱗」であり、今でも新鮮だ。

英国人からすると、現在の日本の歴史教科書は異常だろう。チェコ

の作家、ミランクンデラは「民族を抹殺するに一番良い方法は、その民族の記憶を失わせることである」と言った。先人が気概を示した日本の栄光の歴史については記憶を失わせ、負の歴史のみ子供に刷り込む。これは民族の抹殺行為そのものだ。

かつて米国教育の現状に危機感を抱いたレーガン大統領はこう言った。「もし非友好的な外国勢力がアメリカに対して今日のような凡庸な教育をするように押しつけたとしたら、それは戦闘行為に相当するとみなせるものだ。」近年、日本の歴史教育について周辺諸国による内政干渉まがいの干渉が目にする。今日のような歴史教育を外国勢力が押しつけたとしたら、それはまさに戦闘行為に相当するに違いない。

靖国神社参拝問題も同様だ。靖国神社は近代史そのもの。だが、靖国問題は今や国際、国内政治の道具になり下げられた。外国によって自国の歴史に対し盲目にさせられるという危機的状況だ。まして国家が自国のために命を捧げた人たちに感謝し、その鎮魂と慰霊をないがしろにするようになれば、必ずその国は滅びる。鎮魂と慰霊の禁止を外国勢力が押しつけたとしたら、それは戦闘行為そのものなのだ。

終戦後、占領軍によって靖国神社が焼き捨てられようとしたとき、駐日ローマ法王庁バチカン公使代理ブルーノ・ピーター神父はマッカーサーに献言した。「いかなる国家も、その国家のために死んだ人々に対して敬意を払う権利と義務があり、それは戦勝国か敗戦国かを問わず平等の真理でなければならない。」これにより靖国神社は焼き払いから免れた。だが、皮肉にも日本人がこの真理を喪失した。

歴史については多くの格言、箴言がある。「歴史を軽んずるものは、歴史から罰せられる。」「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。」歴史には先人の知恵が、汗と血と涙で購われた英知が詰まっている。「経験は最良の教師だが、授業料が高すぎる」と言われるように、歴史に学んだ方が得に決まっている。「未来の道標、再生への道は、いつも歴史の中に隠されている」あるいは「振り返れば未来が見える」ともいう。困難に直面したとき筋道を通して解決策を見いだすには歴史を学ぶの

が一番だ。

また、「歴史を振り返らぬ者は、卑劣や臆病に身をまかせがちだ」とも言われる。先人の立場に自分の身を置いたとき、自己を相対的に把握することができ、「卑劣、臆病」の自分を戒めることができる。筆者もかつて似たような経験をしたことがある。空幕勤務時、自分の能力を超える激務に精神的、肉体的にも限界だと弱気になりかかった時がある。その時、ふと「坂の上の雲」で読んだ児玉源太郎を思い出した。「日露戦争当時の児玉源太郎に比べたら、俺の今の苦労なんか…」と思った瞬間、落ち込んでいた気分は軽くなり、再びやる気に満ち溢れた。歴史の効用に違いない。先人の気概を学ぶことは我々軍人にとっては必須だ。

その国の歴史、文化、伝統というものは、アイデンティティそのものであり、国の成り立ちを支えている。現代日本のモラル低下や品格の下劣さは歴史教育の軽視と決して無関係ではない。中西輝政京大教授が述べるように「国というものを最も根底で支えるものは、その文化、伝統、歴史である。これを共有することで、初めて国民は一体感や安心感を得られ、社会のモラルにも命が吹き込まれる」のである。

保守主義の巨頭エドモンド・バークは神ならぬ人間の主張する「自由」はそれだけでは無秩序に陥り、人間が「なりあがりの高慢」な態度を示すようになるのはほとんど不可避だと主張した。秩序と両立する自由であるためには「常に聖化された祖先の面前にあるよう行動する」ことが必要と説いている。日本人の精神的基軸が失われ、自由と放縦の区別がつかず、モラルや秩序が失われ、「なりあがりの高慢」な態度になった日本社会の惨状は、歴史教育を軽視し、先人や先祖との縦の繋がりを断ち切ったつけである。「国家は過去、現在、未来の三世代の国民による共同事業」なのであり、「先祖へのまなざしを失った」結果、「子孫へのまなざしをも失う」ことになってしまったのだ。

(4) 「公」より「個」の優先

モラル低下、責任と義務の軽視、若者の無気力、無責任等、日本社

会の惨状については既述した。この大きな原因の一つに戦後教育により「公」の喪失があることも既に指摘した。

現憲法は「多元的価値観の公平な共存」を理念とする。多元的、つまり個人を重視するあまり「公」の精神をないがしろにしてきたことは否めない。戦後教育では、個人の自己実現の価値観は教えたが、公に尽くすことは教えてこなかった。だが、公に尽くすこと自体が自己実現そのものであるのは人類普遍の真理である。

新約聖書にも「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」とある。ローマ帝国の歴史家キケロも「あらゆる人間愛の中でも、最も重要で最も大きな喜びを与えてくれるのは祖国に対する愛である」と書いている。

人は、他人のため、社会のため、国家に尽くす時に最大の生き甲斐を感じずる動物であり、他人のために生きることは各人にとり、自己実現に他ならない。このような人類の普遍的価値観の基軸や核心にはあえて目を伏せ、枝葉末節のみ教育してきたのが戦後 60 年の教育である。結果は前述の通り、「正義」「名誉」「犠牲」「勇気」等、普遍的価値が社会から喪失し、モラルは地に落ち、「生命と私生活」のみが社会目標となり、「地球より重い命」といった人命絶対主義、そして「ホリエモン」に代表される拝金主義を醸成する結果を生んだ。

また、健全な「公」の精神がないと、健全な資本主義も成り立たない。資本主義は「機会」の平等を求めるものであり、結果の不平等性は不可避である。これを是正する機能が「公」の精神である。結果として偏在した富を社会に還元する。「公」の為に使って貰おうという「公」の精神、つまり「再配分調整」機能が必要である。マックス・ウェーバーはこれをプロテスタンティズムに求め、「財貨は神の栄光のために支出されるべき」と主張した。内村鑑三も同様に「大いに金を貯めて、大いに神のために使え」と述べている。日本にはプロテスタンティズムに代わる武士道精神がもともとあった。このため、富の偏在が最も少ない先進国になることができたのだ。

故松下幸之助は得た巨万の富の多くを寄付等で社会に還元した。当時、彼の収入は85%近くが所得税だったという。彼の口癖は「稼ぎの15%を国からお小遣いとしていただいている」だった。昔の日本人には「公」の精神は普通に存在した。

格差是正の議論が喧しい昨今であるが、法律や制度でこの機能を設けても、所詮限界がある。経営者一人一人の心の中に「再配分調整」マインド、つまり「公」の精神なければ是正は難しいだろう。「官から民へ」の議論に関しても、官と民の間に「公」が必要であることを国民が気づく必要がある。

(5) 国家観の喪失

日本には元々健全な国家観は育ちにくいのかもしれない。日本は「自由」を戦いで勝ち取り、国を造ったという歴史がない。戦後、「配給された自由」を謳歌し、自由に付随する責任、義務については特に意識が希薄になった。

国家は国民一人一人から構成され、一人一人の「義務と責任」から成り立っている。自分自身が国家そのものだという事実に戦後日本社会は目を伏せてきた。敗戦トラウマとマルキシズムの影響は大きい。戦後60年、「公」や「国家」は「個人」と敵対する存在、対立する概念でとらえる風潮が定着した。国家という存在を擬人化して悪役のように扱っているが、国家という人は何処にもいない。国家はつまりは私たちの同胞、友人、知人のこと、そして自分自身のことである。

特に「警察」「自衛隊」は「国家」の手先、敵対する存在であり悪役として忌み嫌われた。自分の子供が警察官の子供というだけで日教組の先生からいじめを受けたと元警察官の佐々淳行氏も述べている。現在の官僚バッシングも同根だ。

国の運営には、国を背負っているのは我々一人一人だという当事者意識が必要である。「国家の運命を我がことのように思う」人、これが本来の市民という意味だと「ローマ人の物語」で塩野七生氏は言う。他人任せであれば、当然その無責任の果実は自らが背負う結果となる。

「立国は公に非ず、私なり。独力の氣力なき者は国を思うこと深切ならず。愚民の上に苛き政府あり」と福沢諭吉が述べるとおりだ。

当事者意識の無さは各種世論調査でも明らかである。朝日新聞（平成19年1月25日）の世論調査によると、「外国の軍隊が攻めて来たら、あなたは戦いますか、逃げますか、降参しますか」の質問に対し、「逃げる」が32%、「降参する」が22%だったという。

2年前の読売新聞世論調査でも、「日本が他国から侵略されたらどうしますか」という質問に対し、「安全な場所に逃げる」が35.4%、「降参する」が8.0%で「武器を持って抵抗する」はわずか16.6%だった。また、小学校の国語のテストで「攻める」の反対語を書けと問うと、多くの子供が「逃げる」と書いたという。一方で「外国に出かけて事件に巻き込まれた場合、日本の国が守ってくれると思う」と答えた人が44.9%もいる。パラサイト現象だ。

数年前、国会での有事法制審議時の議論である。有事法制は「国民の権利が制約されないか」と国会で議論された。「仮に国家の安全保障に重要な支障が生じようが、住民の意思を尊重するのが民主主義の基本ルール」と述べた国会議員もいる。人権など国民の権利は国家の存在を前提とした権利であって、国家が消滅して権利が守られることはあり得ない。人間にとって最重要事項は安全の保証であり、住民の意思の尊重は国家の安全が保障されてこそ実現する。これは国際的にも議論の余地のない常識だ。だが、日本の国会ではこのような議論がまかり通る。選良たる国会議員にも国家観がスッポリ抜け落ちている人がいる。これが日本の現状なのだ。

米国の国家観はどうか。米国はもともと太古の昔から自然に成り立ったような国ではない。努力して人工的に作った国である。従って、米国民は義務と貢献によって国家が維持され、平和と安全が実現されるという当たり前の事実を知っている。「国から何をしてもらおうかではなく、国に対し何ができるか」を国民に問うたケネディー就任演説からもよく分かる。

教育も幼稚園から徹底して健全な国家観を植え付ける。余談であるが、筆者が20数年前に米国に留学したとき、息子を現地の幼稚園に入園させた。息子が初めて覚えてきた英語は、毎朝国旗掲揚時に宣誓する米国に対する忠誠のフレーズであった。幼稚園から国家への忠誠を繰り返し徹底して脳裡に刷り込んでいる。

米国の小学校では徹底して次の三つのことを教え込む。①クラスみんなで決めたことは、イヤなことでも一緒にやろう ②町でお巡りさんが困っていたら、手伝おう ③両親の言うことと、先生の言うことが違っていたら、両親の言うことを聞くように

①は一人一人が意志決定者であることを学ぶと共に、多数決という民主主義の精神を植え付ける。②は義務と貢献によって国家が維持され、平和と安全が実現されるという事を学ばせる。③は家族の価値を再認識させる。こうやって、国家が義務と貢献によって維持され、平和と安全が実現されるという当たり前のことを学ばせ、健全な国家観を育むのだ。

フランス革命にも多大な精神的影響を与えたとされるルソーは「社会契約論」で次のように述べる。「共同社会を守るために『お前の死ぬことが国家のために必要だ』というとき、市民は死ななければならない。」よく言えば個人を尊重する、悪く言えば自己中心的なルソーでさえ、このような国家観を主張する。

国は経済では滅ばない。国家、国民を真剣に考える人間の有無に掛かっている。つまり国家的なアイデンティティを持つ指導者の存在の有無だ。指導者は国民の中から自然発生的に出現するもので、健全な国家観を喪失した国民からは救国の指導者は決して現れないのだ。

3 教育再生に向けて

(1) 教育は強制から始まる

日教組の教育研究集会の様子を新聞で読んだ。「子供達が『挨拶って

とっても大事だな。挨拶したいな。』という気持ちになったら私たちは指導します」と先生が発言したという。なんと馬鹿な…これだから教室から秩序が消えるのだ。思わずため息が出た。

戦後、強制は悪とされた。だが、戦後教育の「強制反対」「自主性尊重」「個性尊重」は偽善的美名に隠れた「教育義務放棄」だった。既に教育現場の惨状として結果が出ている。

教育は程度の差こそあれ、強制から始まって自発性を目覚めさせるものだ。何処の国でも、どの社会でも子供の教育は、はじめは全て強制に始まる。挨拶や、礼儀、マナー、簡単な生活のルールも、そして奉仕、勇気、思いやり、責任、義務等も、理由なしに頭から教える。普遍的価値は刷り込むもの、強制して体得させるものだ。その上に多様な価値観が芽生えるのだ。

強制や知識の詰め込みは子供達の思考力、想像力や主体性、創造性を損なうという説が戦後、意図的に巷間流布された。だが全く根拠のない俗説だ。真実であれば、米国、英国、インド、韓国、中国等の子供達はとっくに思考力、想像力、創造性がなくなっているはずだ。権威、権力を否定するマルクス主義の影響を受けたのがこの俗説だ。未だに日本だけがこの俗説を後生大事に信奉している。普遍的価値の強制、徹底が個人を失うという説も誤りだ。

「三つ子の魂百まで」と言われるように、普遍的価値は幼い頃、徹底して刷り込まねばならない。特に善悪の判断の付きかねる幼児期の教育は価値観の強制からだ。前述したように、米国では幼稚園から毎朝、国旗掲揚をさせ、国旗に対し敬意を表し、国家への忠誠、社会への貢献を宣誓させている。普遍的価値は、幼児期から学校と家庭で徹底して身につけさせねばならない。

(2) 自我を抑え、我慢を教える

自主性、主体性を尊重した結果、「自立した個人」ではなく、我慢できない「自分勝手」な人間を生んだ。戦後教育の目標とした「個人主義」は「全体の強制にも屈せぬ思想、哲学にも繋がる強靱な意志」を

育成するはずだった。決して間違いではない。だが、自主性尊重という名の教育放棄の結果、「ワガママ」を育み、他人に干渉されたくも、したくもないという程度の私生活重視のライフスタイル、「私生活主義」を生産しただけだ。理想とは裏腹に自分勝手に非常識で我慢できない個人を育てる結果となった。この因果関係の認識が先ず必要である。現状を認めようとししないのは「将来にも盲目であり続け」、変革のモチベーションは生起しない。

強制以外に我慢を教える手段は少ない。体罰なし、強制なしの教育に我慢は育たない。結果、すぐに「切れる」。そして大人になって「自殺」する。精神的に弱い人間が育つのだ。

実社会は厳しい競争と優勝劣敗の世界である。「お手々つないでゴールイン」で挫折も苦痛も我慢も経験させず、温室で育った若者が、突然弱肉強食の実社会に放り出される。しかも「公」を喪失し、社会との関わりの自己認識がなく、そして自己実現の動機も持たない若者が突然優勝劣敗の世界に押し出される。それは拷問に近い。社会的適応に困難を覚え、引き籠もるか、たたずむか、はたまた精神を病むか、時には自殺を図る。これは必然だ。挫折やストレスに対する免疫を付けさせることは学校教育の重要な役目であり、責務でもある。もちろん家庭教育の役割も重い。何より家庭から実社会への踏み台としての学校教育を蘇生させることは急務だ。

「みんなの為に我慢する」「みんなに迷惑をかけない」の価値観を学校と家庭で共有し徹底する。“One for all, All for one”の普遍的価値を体罰、強制を厭わず徹底して刷り込む。「公」のためには「自我」を捨てることを幼き頃から習い性にする。戦後、あえて避けてきたことだ。だが、これから逃げれば結果的に若者を苦しめる。民主主義が成り立っていくのに不可欠な精神要素でもある。これを身につけた若者は、決して成人式で騒いだりはしない。

(3) 偽善的教育の是正

米国では統計的に、不良少年、少女は牧師の家から一番多く出てい

るという話を米留中に聞いた。牧師が教会で話す理想と、家庭内における牧師自身の実像との落差、ダブルスタンダードを見て、この世に偽善、幻滅を感じるからだという。若者にとって偽善やダブルスタンダードほど心を傷つけられることはない。

戦後、「平和と民主主義」がこれほど謳われたことはない。だが若者は敏感にその偽善性を感じとっている。日本の「平和」とは「争わないこと」、「個性尊重」とは「わがままの尊重」、「民主」とは「個人のわがままを認めること」ではないか。なんか変だ。「社会や公の価値追求」が何故、「平和と民主主義を危うくするもの」なんだろう。「国家が追求すべき価値」について「議論すらタブー」である、とするのはどう見てもおかしい。「生命と生活」のみが社会目標なんて、どう考えても偽善だ。

戦後平和主義の偽善的体質は、おかしいと思いつつ、誰も指摘して来なかった。戦後60年が過ぎ、偽善を正面から指摘し、これから脱すべき時期に来ている。日本社会から消滅した「正義」「名誉」「自由」「勇気」等、普遍的価値を銜うことなく真剣に大上段に振りかぶって教育すべき時なのだ。

若者達は純真で、感受性豊かであり、不自然なことは敏感に感じ取る。大人が考えるほど無知ではない。敗戦トラウマとマルクス主義の影響を受けた日本社会の偽善に対してそっぽを向き、牧師の子供のように自暴自棄的反抗をしているのが今の姿なのだ。

(4) 「愛の鞭」の奨め

戦後の日教組教育が忌み嫌った三大悪は①校則 ②体罰 ③管理教育である。校則、管理教育をなくした結果、学校は無秩序になり、体罰をなくした結果、教師は最後の指導手段を失った。

この風潮は60年～70年代にかけ、先ず米国の教育界で広がり、米国の教育は地に落ちた。危機感を抱いたレーガン大統領が規律重視の理念で教育改革を強力に推し進め、教育を立て直したことは前述した。既に失敗の結果が出ているにもかかわらず、日本は頑なに失敗路線を

走り続けている。

この期に及んで、未だに「体罰は絶対いけません」と主張する人が多い。こういう人は体罰と暴力を意図的に混同している。何が何でも体罰はいけないというのは偽善だ。かつては「愛の鞭」という美しい日本語が存在した。いつの間にか、この日本語は消滅した。

体罰と暴力は明らかに違う。前者は「子供達を進歩させることを目的とした力の行使」であり、後者は「自分の利益を目的とする力の行使」だ。子供を想い、子供の進歩の為に、時に「愛の鞭」は欠かせない。「子供が受けるべき最初の感謝すべき教訓、それは両親よりの平手打ちだ」とキエルケゴール（哲学者）は述べる。「子供には大人から叱られる権利がある」といわれるように、「愛の鞭」は子供が受ける権利であり、先生と親は与える義務がある。

ノーブレス・オブリージュの国、イギリスのパブリックスクールでは、現代でも教育現場に本物の鞭が使われているという。近代イギリスのエリート育成のあり方は、長期にわたる熱心な模索の結果、文化の中に内蔵されている。愛の鞭も大国として受け継がれてきた歴史的ノウハウなのだ。

コンラッド・ローレンツ（動物学者）は「幼き頃、肉体的苦痛を味わったことのない子供は成長して必ず不幸な人間になる」と主張する。体罰と肉体的苦痛、いずれも子供の将来には欠かせない栄養素だ。栄養失調で死ぬ前に、もうそろそろ偽善の蒙昧から脱皮すべき時だろう。

（5）参考になる米国の教育再生状況

1984年、レーガン政権は教育レベルの低下を「国家の存続に係わる緊急かつ最重要問題」と位置づけ、ドラスティックに教育改革を図り、学校教育を劇的に好転させた。

非行を働く子供には矯正を強要する。「ゼロ・トレランス」理念で例外を認めない。決して妥協を許さない。ニューヨークから犯罪を激減させた「壊れ窓」理論の学校版だ。非行少年、少女は反省用の代替学校に入れて矯正する。「チャーター・スクール」という規律重視の学校

も設立された。日教組が最も忌み嫌う管理教育を導入、徹底し、着々と成果を出しつつある。

「ゼロ・トレランス」理念を導入した結果、学校現場が劇的に改善したという具体的事例をある雑誌で読んだ。ニューヨークのハーレムの中にある中高6年制の学校を訪問した荻田吉夫氏(森ビル特別顧問)がその状況を書いている。

「学校は制服を採用し、学校の入り口には大きな鏡が置いてあり生徒は校舎に入る前に自分の服装をチェックしなければならない。教師立ち会いの下、ネクタイからベルトの高さまで必要な指導をする。携帯、iPod、ウォークマンの類や華美な装身具は全て御法度、規律に違反すれば下校時まで没収されるほか、校舎清掃の罰則が科せられる」

この学校は、規律正しく学業成績も良いことでは定評があり、卒業生の殆どが良い大学に進学しているという。彼らの動作や振る舞いが実にきびきびとして、態度も爽やかなのに強い印象を受けたと荻田氏は述べる。米国の公教育制度は一般的にはとても悪い。だが、この学校のように指導理念を徹底して、成功している学校はニューヨークを中心に5～6校あるという。

この学校の指導要領が、実は昔の日本の教育制度を手本にしたことは知られていない。この学校の先生達が日本に来て、日本の学校現場の惨状を見て、愕然としたという。我々の学校は日本の昔の学校制度を参考にして復興した。だが、日本の今の現場は決して我々の生徒に見せられないと。皮肉なものだ。

また米国では、男女共学から男女別学が見直されつつあるという記事が最近の新聞に出ていた。ロサンゼルスでの男女別学実験校の校長は次のように述べる。「とりわけ男子だけのクラスにいい影響が感じられる。この年ごろの男の子は女の子をどうしても意識してしまうが、男子だけのクラスなら失敗を恥ずかしがることもない。」昔の日本がここでも復活しようとしている。

日本の不幸は戦前教育を全否定したことだ。日本の昔の教育を復活

するだけでかなりのことが改善される。アメリカの成果は、これを証明している。こう言えば、日本では反射的に「戦前回帰」、「アナクロニズム」、「復古調」とか非難される。特に有識者はこの批判を恐れる傾向がある。だから思っているも誰も口にしない。だが教育の再生は「復古」に鍵があることは確かだ。改革は常に一種の復古である。そろそろ非難を恐れず主張すべき時ではないだろうか。

4 自衛隊の教育のあり方

92年のカンボジア派遣以降、自衛隊は海外での任務の機会が格段に増えた。現時点でも我が航空自衛隊員が中東の地で黙々とイラク人道復興支援に汗している。海外での任務は、自衛隊の実物像を諸外国の眼に晒すことになる。自ずと厳しく比較、評価される。

これまで、自衛隊員は概して諸外国に高い好感度を持って評価されてきた。規律厳正、礼儀正しく、使命感旺盛、誠実で黙々と任務遂行に専念する。さすがは武士道の国から来た兵士達。同盟国米軍の評価も高い。これらは自衛隊の教育成果であり、これまでの自衛隊の教育に自信を持っていいだろう。

ただ、海外派遣部隊は選抜した隊員で構成されており、必ずしも自衛隊員全体のレベルの高さを表したものとは言い難い。また、平和協力活動という比較的安穩かつ容易な任務である。戦死者続発というような困難な任務や激戦地の真っ直中での任務をもって自衛隊の実物像が評価された訳ではない。期間も比較的短期間だ。極限下における長期間の激務は未だその洗礼を受けてはいない。どんな悪条件下の厳しい任務でも、現在のように粛々と任務が遂行できて初めて自衛隊教育は合格点をもらえる。

人を巡る環境はこれから益々厳しさを増す。入隊適齢人口の減少傾向は少子化傾向と比例する。若者の絶対数減少は当然入隊する優秀な若者達の減少に繋がる。隊員の質は自ずと低下する。自衛隊は社会の

縮図である。「公」を喪失し、マナー、礼儀を知らず、躰や思いやりを理解せず、我慢も知らず、日本の歴史や文化、伝統に無知な若者が続々入隊する。日本社会の惨状から自衛隊も決して局外に立ち得ない。その影響は必至である。自衛隊の教育も将来を見通し先行的に見直すべき時だろう。今までできていたから、これからも立派にできるとは限らないのだ。「今までこうだった」は早晚通用しなくなるだろう。過去の成功体験は棄却し、将来を見通して先手を打つ必要がある。

最近、こういう事例を耳にした。ある新隊員を本格的教育前の準備訓練として、少し散歩させた。すると新隊員はそれだけで骨折したという。骨密度が非常に低いという診断結果だ。食生活をないがしろにされて育ったため、若くして骨粗鬆症になったらしい。こんな事例も聞いた。人と人との関係がうまく保てない隊員がいる。隊員同志のコミュニケーションもとれず、食堂で皆と一緒に食事すらできない。隊員はその都度食事を内務班に運んで食べているという。

少し特異な事例かも知れない。ただ、自衛隊の柵外では別に異常ではないという。日本社会の影響は自衛隊にも津波のように押し寄せる。兵士として教育する前に、普通の人間になるための教育が必要だ。本来、学校や家庭でやるべき教育まで自衛隊で実施する必要が出て来ている。自衛隊の教育に関する根本的な発想の転換は、将来の課題ではなく喫緊の課題、いや焦眉の急務だ。家庭が悪い、学校が悪い、社会が悪い、マスコミが悪いと愚痴を言っても始まらない。国家の防衛、安全保障に「待った」はなしだ。家庭がだめ、学校がだめなら、自衛隊を学校、家庭、社会に代わって「まっとうな人間」、「まっとうな国民」を作る教育機関として位置付けるしかない。自衛隊は精鋭な兵士を育てる前に先ず「まっとうな日本人」を育てる人間教育の役割を果たすことが求められている。砂上に楼閣は建たない。戦う技術を教える前に、一からの生活指導、躰教育、人間教育が必要なのだ。

では、どのように「まっとうな日本人」を育てるか。戦前には至極当たり前だった事を至極当たり前に教育することだと筆者は考える。

以下、その方向性について述べる。

(1)「公」の復活

「事に臨んでは危険を顧みる」ことを許されない自衛官は、「公」なくして存在し得ない。人間は常に「公」の為に尽くし、「公」の目標達成によって自己を実現する。“One for all, All for one”の価値観を体得すべき哲学とし、日常生活のあらゆる機会を通じ繰り返し徹底する。チームプレーのスポーツ、任務における連帯責任等、自衛隊生活のあらゆる場で、あらゆる機会を通じ、誠実を旨とし、自分自身のことよりも任務あるいは他者を優先し、何事にも最善を尽くすという普遍的、根元的価値観を徹底して教え込む。そして「公」に尽くす喜びを体得させる。

どこの軍隊でも、共通して兵士に要求している精神は”Service Before Self”（他者優先精神）の精神である。人間誰も自分が一番可愛い。この自分よりも家族を、同僚を、社会を、そして国家をと自分を捨てて愛する対象を拡大していく教育を徹底する。儒教の「修身、齐家、治国、平天下」にも通じるものである。

数年前、航空自衛隊の T-33 練習機が入間川に墜落して操縦者が 2 名殉職した。操縦者は民家を避けるため、ギリギリまで T-33 を誘導しようとして脱出が遅れた。この時、ある高校の校長先生が生徒の教育のために書かれた一文がある。

「母は我が子のため、父は家族のために命を投げ出して戦います。これが人間の本当の姿なのです。その愛の対象を家族から友人へ、友人から国家へと拡大していった人を我々は英雄と呼ぶのです。」こういう基本的な道理を一人一人の隊員の心に刻む努力を自衛隊挙げて傾注することが大切だ。

価値の基軸をしっかりと持ち、基本的な道理が得られれば、その基軸への帰依は当然その価値への忠誠を強いる。さらには自己犠牲をも伴った責任の履行という代償を強いるものだ。「公」の復活により、名

誉 (Honor)、忠誠 (Royalty)、誠実 (Faith) といった死語化した日本語も復活させることができる。極限の状況下にあっても、ひけらかさない自己犠牲の精神、ある種の矜持に裏打ちされた献身の気風を醸成すべく、組織を挙げてあらゆる手だてを講ずることが重要だ。

(2)「当たり前」の復活

約束は守る、礼儀、マナーを重んじる、思いやりの心を持つ、目上の人に敬意を払う、何事にも勇気と誠意を持って事に当たる。これらは人間として当たり前のことだ。この当たり前の事を体得させる。

人の人たる所以は「敬する心」「恥する心」を持っていることと言われる。武士道精神と言い換えてもいい。武士道精神は昔の日本人にとって当たり前のことだった。「義、勇、仁、礼、誠」で表現されるこの精神は日常生活の実践を通じて教育された。「勇気、奉仕、徳」はギリシャ語では、一つの単語で表されるというが、日本人の血肉になっていた。この「当たり前」の復活をはかる。

問題はどのようにこの精神を会得させるかだ。やはり、これも王道はない。昔の教育のように、素晴らしい先人の労苦を歴史で学ぶ。同時に、日常生活で躰教育、基本の徹底を反復実践、継続することだ。

基本の徹底、躰教育については、森信三氏(教育者)の主張する「時を守り、場を清め、礼を尽くす」にヒントがあると考ええる。筆者はこれを若干修正し「身を清め、時を守り、礼を尽くす」をスローガンに各指揮官に隊員指導を実践させている。

「身を清め」は端正な服装、美しい挙措容儀、職場の清掃、整理整頓、「時を守り」は時間厳守、「礼を尽くす」は挨拶、敬礼動作、言葉遣い、長幼の序等である。日常、これを繰り返し教育、実践し、不備があればその都度是正する。形を強制し、形から入り、形を習性とすることにより内面形成を図る。

部隊訪問の度に感じることもある。隊員の躰教育、基本教練等の基本が出来ていない部隊は、間違いなくその任務遂行能力は低い。基本教練が出来ているからといって優秀な部隊とは限らないが、出来てい

ない部隊は例外なく駄目な部隊だ。

洗濯されプレスの入った制服、そして制服にふさわしい姿勢、態度、動作、言葉遣い、礼儀作法、これらが習性になれば自ずと自衛官としての覚悟と気品は表れる。職場はいつも清潔で清掃が行き届き、常に整理整頓に心掛ける。職場の周辺は常に草が刈られ、凜とした風情を感じる。隊員の着衣、姿勢、行動において、一つの間違い、一点のシミもない。こういった有り様は、職責に対する誠意と熱意の象徴となる。また責任と自信の表明ともなる。やがて容儀、態度、礼儀が生活の基本であることに大きな意義を認めるようになり、自ら納得し、進んでこれを実践するようになる。その時、「当たり前」のことは自然に復活してくるのだ。

(3) 「我慢」の体得

すぐ「切れる」若者にどのように「我慢」を教えるか。隊員達は既に成人した大人だ。彼らに対し、「体罰」をもって強制したりはできない。これも王道はない。「我慢」の必要性を納得させ、自己修練の重要性を、そして自らの精神を鍛えることの喜びを教えるしかない。如何にこの動機付けを与えるか。多かれ少なかれ昔から悩みの種であり永遠の課題であるようだ。山本五十六元帥が書を残している。

『男の修行』

苦しいこともあるだろう
言いたいこともあるだろう
不満なこともあるだろう
腹の立つこともあるだろう
泣きたいこともあるだろう
これらをじっとこらえていくのが
男の修行である

ローマ帝国の哲人皇帝マルクス・アウレリウスも述べる。「感情を抑制するのに、賢者の哲学も、皇帝の権力も何も役に立たない時がある。そのような時には、男であることを思い起こして耐えるしかない。」自

らの欲望や我を抑え、信念と情熱を内に秘めたる成熟したたはずまいと、強さを有する伝統的男の美学を追究することが如何に重要であるか。これを悟らしめることが重要なのだ。ちなみに、男女平等の世の中、「男」が不都合であれば「自衛官」と言い換えたい。

(4) 自衛隊における歴史教育

歴史教育の重要性、そして学校における歴史教育の欠陥については前述した。健全な歴史観、国家観は自衛官に必須である。先人の示した気概を自らのものとすべく歴史を学ぶことは自衛官にとって責務でもある。歴史を学ばずに入隊してくる若者には自衛隊で歴史教育をやり直すしかない。幹部も例外ではない。防衛大学校も今は日本史を学ばずに入学できるそうだ。士官学校で自国の歴史を学ばずに入学できる国はおそらく日本くらいだろう。

学校の歴史教育は「縄文時代」から入り、通常尻切れトンボで終わる。自衛隊の歴史教育は逆に現代史から入れればいい。「教育」と言うと、いかにも堅苦しいが、歴史を学ぶことの楽しさを知り、歴史に興味を持ち、自ら歴史を学ぼうという意欲を振作すべく導くべきだ。歴史を学ぶことは我々自衛官のライフワークなのだ。

面白くて興味をそそる歴史小説から入門するのがいいと思う。司馬遼太郎、山岡荘八、児島襄、豊田穰、半藤一利、童門冬二、保阪正康、伊藤正徳等々、すばらしい著者によるノンフィクションから小説まで、血湧き肉躍る歴史書には事欠かない。

若者達が歴史を学ばないのは、「食わず嫌い」が多い。学校で歴史を学ぶ面白さを教えていない学校教育の欠陥だ。最初は強制でも、無理矢理「食わせ」れば、必ず「好き」なる。これは既に実証済みだ。筆者はこれまで部下に司馬遼太郎を半ば強制的に読ませ、読后感想文を書かせてきた。感想文を読んでもみると、まじめに課題に取り組んだ者は、必ず歴史の面白さに目覚めている。読後のディスカッションまでやらせれば更に効果は上がるだろう。

歴史は先人の労苦を知り、自己を相対化して冷静に観察できるよう

になることは前述した。この他にも、歴史を学ぶ効能は多い。幹部としては歴史をただ学ぶだけでは不十分だ。一歩進んで戦史を探求することが求められる。クラウゼウィッツも指揮官教育は歴史を題材にすべしと主張している。

彼は「いかなる優秀な将帥も、敵に勝つことのできない者は、将帥としての資格なし」と述べた上で、「敵に勝つ」方策探求の理論は有り得ないが「戦争とは何か」を究明する理論はあると主張する。それには「戦史の広範かつ深刻な研究」によるしかない。そして戦争の本質の理解が能力となり「決断力」となり、ひいては「敵に勝つ」ために有効だと説く。

将帥の判断力、決断力、実行力に与える影響として「戦争における摩擦」がある。平時が長く続いた軍隊は弱体化する例が殆どだが、その大きな原因は「摩擦」に対する感覚が薄れて机上の戦争認識に陥りがちだからである。平時においてこれを補うのも、「戦史の広範かつ深刻な究明」によるしか他に方法がないとも彼は言う。幹部が徹底して戦史を学ぶことは趣味ではない、責務なのだ。

日本では戦後歴史教育は軽視されてきた。それに呼応するかのよう
に自衛隊でも歴史教育はほとんど強調されて来なかった。今後は幹部の育成のみならず、まっとうな日本人育成のため、自衛隊という組織を挙げて歴史教育に力を入れていくべきだろう。

「まっとうな日本人」を育てる人間教育機関として自衛隊を位置づけること。その際、強調すべき4つの方向性を述べた。教育というと反射的に「適当な教育者がいない」の答えが返ってくる。教育は水が高きところから低きところへ流れるがごとき、これは理想だ。立派な教育者がいればこれに過ぎることはない。そうは言っても吉田松陰のような理想的な教師は現実にはいない。だが、それを言い訳にはできない。自衛隊のような武力組織にあっては、不完全な人間が不完全な人間を育てつつ、教える側の不完全な人間も共に進歩していく。これが追求すべき現実的姿である。まさに「教え、且つ戦う」組織でなけ

ればならない。

自衛隊での人間教育は知識の詰め込み教育ではない。まして机に座って教壇から先生が教えるようなものでもない。本人が自覚し、日常生活の中で実践し、自らが会得していくものだ。努力の方向性を示し、納得させて心にやる気の灯をともし、自分自身によって研鑽する重要性を認識させ、興味と意欲を喚起することを目標とすべきだ。河原に連れて行く事はできるが、やはり最後に水を飲むのは本人なのだ。

おわりに

カエルは熱い湯の中に入れると、生命の危険を感じて飛び出そうとする。だが低温の水から徐々に温度を上げていくと、変化に気づかず死ぬまで熱湯に浸かっている。これを「ゆでガエル」と言う。

日本は今、「ゆでガエル」状態ではないだろうか。日本人の精神的メルトダウンは戦後2～3世代でゆっくりと進行し、その深刻さに気づいていない。いや気づこうとしないだけなのかも知れない。「今時の若い者は」という言葉は古代からある。だから心配ないと筆者も思いたい。でも現代社会の惨状はちょっと異常だ。どう見ても日本の危機と捉えてならない。筆者の杞憂であれば幸いなのだが…。

この惨状の原因は教育にある。戦後60年のボディブローの効果が現れてきたのだ。この回復は容易ではない。時間もかかる。だからこそ一刻の猶予もない。できることから、直ちにやらねばならぬ。

福沢諭吉は言う。「政治上の失策の影響は大きいだが、それに気づいて改めれば、鏡面の曇りをぬぐうのと同じで痕跡は残らない。しかし教育の場合は、アヘンのように全身に毒が回って表面に表れるまでは歳月を要し、回復には幾多の歳月を要する。」

自衛隊にも日本社会の惨状は怒濤のごとく押し寄せている。文明は自然死しない。自殺か他殺かのどちらかだが、前者が圧倒的に多いという。手をこまねいて為す術もなく茫然自失しているのは自殺に近い。自衛隊としても、やれること、やるべきことは多くある。国家の安全

保障に待ったはないのだ。

「子供は親が育てる、青年は教師が育てる、中年は社会（職場）が育てる、老人は自らが育てる」とは理想的な教育の姿だ。だが、家庭も学校も機能不全なら自衛隊が親や教師になり代わり日本人を育てるしかない。自衛隊は外なる脅威に立ち向かえる精強な武力集団でなければならぬ。同時に内なる「虚ろなもの」に対抗できる「まっとうな日本人」を育てる教育機関でなければならない。自衛隊が立派な日本人を続々と世に送り出して教育の範を示すことが大切なのだ。自衛隊は国防の最後の砦であると共に、日本の美徳、武士道精神の最後の継承者でもあるのだ。